

選評

松原知生

「帝国と自由 ソドマのスペイン人礼拝堂装飾にみる皇帝礼賛と聖母崇拜」

本論文は、シエナのサント・スピリト聖堂スペイン人礼拝堂のために1530年に、画家ジョヴァンニ=アントーニオ・バツィ、通称ソドマが手がけた絵画装飾を、従来の様式論や図像学の方法を踏まえつつも、さらに広く、当時の社会的、政治的、宗教的な文脈との密接な関連において読み解こうとする、きわめて意欲的な試みである。氏はここで、古さと新しさ、権力と自由、聖と俗など対立する要素が巧みに構造化されている点に注目する。そしてそこから導き出されたのは、当時のシエナ市民が「庇護者」としての神聖ローマ皇帝カール五世とスペインに対して抱いていた両義的な感情を当作品に読み取るという、斬新な結論であった。

松原氏の方法は、あくまでも作品の分析と記述、一次資料の検証から出発し、それに基づいて作品が本来もっていた象徴性と機能とを明らかにしようとするもので、その意味で、近年ありがちなメタ・ヒストリー的な美術史とは一線を画すものである。しかしながら、松原氏は、従来の実証的な美術史に終始することなく、記号論、テキスト理論、表象論、受容理論、歴史人類学、ミクロ・ヒストリーなどの新しい研究の方法論を、独自のかたちで消化したうえで、研究対象の分析・記述に取り込もうと試みている。選考委員会においてこの論文が高く評価されたのは、なによりも著者が、そうした方法論的な自覚と反省のうえに立って、具体的な対象にアプローチしようとしている点である。

松原氏が本論で取り上げた時代のイタリアは、まさに、宗教的にも政治的にも芸術的にも大変な激動期で、さらに他のヨーロッパ諸国との関係も錯綜してくる時代であった。芸術と宗教と政治のあいだの複雑な絡み合いと葛藤という、イタリア16世紀の美術にとってもっとも興味深いテーマが、今後さらに松原氏によって、方法論の練り上げとともに、歴史的でかつ理論的な視点から、より多くの具体例とともに解明され深められていくことが期待される。ここに、本論文に「『美術史』論文賞」を授与する所以である。